

小田原市文化振興ビジョン推進委員会 第5回会議

1 日 時：平成28年4月25日（月） 10：00～12：00

2 場 所：小田原市役所 301 会議室

3 出席者

(1) 委員（10名）

水田委員長、鬼木副委員長、石田委員、中根委員、萩原委員、関口委員、木村委員
片桐委員、高橋委員、深野委員

鬼木副委員長 11時30分退席

(2) 行政（9名）

関野文化部長、文化部副部長、文化政策課長、石川文化政策課長、砂川専門監、
諏訪部文化政策係長、湯川芸術文化創造係長、間瀬芸術文化活動専門員
酒井主査、堀井主任

4 傍聴者 0名

5 会議の概要

第4回会議の振り返り

事務局より、資料1に基づき説明

【副委員長】

前回欠席だったが、資料を拝見して、本質的な議論をなされたと思う。

議題（1）条例の骨子案について

事務局より、資料2～資料4に基づき説明

【副委員長】

前文に「危機において文化は必要とされる」と加えてほしい。

今回の熊本の震災を受け

例文として、「私達の街は過去幾たび危機に陥りましたが、そのたびに文化の力によって前へと歩みを進めて参りました。」

戦後や、震災の直後、私たちが危機から立ち上がる時に文化が必ず必要とされるということを入れてほしい。

【委員A】

賛成である。

【委員長】

前文は文章としてパブリックコメントには出さないということであるが、前文に入れても良いし、方向性で入れても良いと思う。

【副委員長】

東日本大震災の際に伝統文化の復興がいち早く取り組まれた。生活と文化が切り離せない、住んでいるものの誇りを回復するということを東日本で学んだ。今回の熊本でも同じように早く回復しようとするはずである。そうしたことが、条例の中で意識しているということも入れておけば、万が一のことがあったときに思い出して、動ける。

【委員長】

伝統文化だけではなく生涯学習なども含めて幅広くとらえる必要がある。

「人」と「市民」などの書き方についてはどう思われるか。

【委員 B】

最後まで残される課題としては、「私たち」や「私たち市民」という表現である。主語をどうするかという問題は、タイトルにも関わってくる問題である。

前文について申し上げると基本的に柔らかい文章構成だが、小田原の誇りやプライドを強く感じる。特に2段落目について、私が今まで勉強してきたところが上手く反映されていていいと思うが、「覇者」という言葉が気になる。暴力的なイメージにつながるように思うが、戦いを想起させるような言葉は避けたい。「危機」というのも同様である。

【委員 A】

関東の中心都市としてというイメージだった。

【委員長】

覇者ということで、文化的にも経済的にも中心だったということも言える。

【委員 C】

関東という言葉も取りようによっては、意味が広がるため、詰めるようにせずもう少しふわっとした表現にしたほうがよい。

【委員長】

「覇者」についての歴史的な考察については、事務局にお願いしたい。

主語の話だが、重要な論点となる。前文の場合は、歴史的な部分を「人々」と使って、現代から未来に向かっては「市民」を使って使い分けている。条例の場合は、「市民」に統一している。

【文化政策係長】

基本的に一般的な部分は、「人々」を使用している。

市民の方々がつくる文化ということで、後半の部分は「市民」と「私たち」という言葉を使用している。

【委員長】

「私たち」イコール「市民」というイメージか。

【文化政策係長】

そうである。

【委員 D】

「私たち」という方が、「市民」よりも一般的な感じがする。

【委員長】

前文は、「私たち」。条例は、「市民」になっている。

【委員 D】

「私たち」の方がやわらかい。小田原市の文化条例なのだから、あえて「市民」と書くよりも「私たち」と書いた方がやわらかい。

【委員 A】

「私たち」という表現は、読む人も含まれるため、そこに主体性が生まれる。しかし、「市民」という表現になると行政対市民という対立概念が生まれる。「私たち」の方が私たちも関わっていくという意識が生まれる。市民だと固い。

【委員 D】

社会包摂という概念を入れるなら、「私たち」という表現の方がよいのではないか。

【委員 B】

「私たち」というトーンが、前文に関してはベストだと思っている。

最後の「小田原に暮らすすべての人が」という部分は突然表現が変わるため、違和感がある。

また、「私たち市民の活動」というところで、「市民」が出てきてしまう。しかし、「市民」というのを出すのもテクニックである。条例の中に「市民」という言葉は必須である。なぜなら、市民の役割という項目があるからである。ただし、前文のトーンは揃えた方がよい。

【委員長】

最初に「私たち市民」という風に出して、以下「私たち」という形で省略しているように思える。

【委員 B】

そうしたしっかりとした考えで使っているのであれば良いと思う。

【委員 C】

振興ビジョンの比較をお願いし、資料4を作成していただいた。振興ビジョンに「私たちが考える文化振興」の章があり、そこに「この文化振興ビジョンの主体は、「私たち」です。「私たち」とは、小田原市民だけでなく、小田原の文化振興に関わるすべての人を含みます。」という文があるので、「私たち」という分がこういう意味として使われるということになるのではないか。

また、振興ビジョンの大枠で、一般的に市民が何をやるのかというところでは、「市民」

という言葉を使っている。

主体としてというところでは、「私たち」でよいのではないかと思う。

水田委員長の言うように「私たち市民」という言葉を出して、アクセントをつけて後半の責務の部分への布石を打つということも良いと思うが、振興ビジョンをベースに整理をした方がよいと思う。

【委員長】

前回の会議では、文化の担い手は、小田原の市民ではないという議論があった。小田原を愛しているという人も含むという話もあった。「小田原に暮らすすべての人」という表現を使ってしまうと排除してしまうことになるため、ここは整理できるか。

【文化政策係長】

「私たち市民の活動」のところは、市民活動という意味を含めて使用している。

小田原に暮らすという部分は考えたいと思う。

【委員長】

条例は、「市民」という言葉と「私たち」という言葉を技術的に使い分けるのであれば違和感がない。

前文は、一番最初に「私たち市民」と入れておいて、それ以降は「私たち」という表現にしておくとここで定義が済むのではないか。

【委員 C】

前文の部分では幅広く、条文の部分では市民と使い分けを行った方がよいのではないか。

【委員長】

文章の中で一文定義づけするということか。

【委員 C】

前半で定義づけしておけば、後半で「市民」という言葉が使われても違和感がない。最初の前文又は基本理念のところで、文章の中で一文定義づけする。

【委員長】

前半に定義づけしておいて、後半で「市民」という言葉で使い分けしないと、後半部分は、幅広くとらえることができない範囲かなと思う。

【委員 E】

前文で出てきた「小田原で暮らすすべての人が」を「小田原を愛するすべての人が」という表現にしてはどうか。

【副委員長】

前文で私たちと書いて、基本理念くらいまでは私たちと書けるのではないか。そこから後ろを行政と市民にかき分けるのかなと思う。

【委員長】

前文では、目的や理念を含んでいるため、そこで切るわけにはいかないと思う。

私たちという表現を基本理念まで使えるかということろだが。

「私たち」という言葉が、前段で一文定義づけされていれば、良いと思う。

【委員 F】

話を戻すが、委員 B のご指摘のあった「覇者」という表現は、小田原北条から文化があり、変える表現は、何がふさわしいか考えていたが、「北条時代には」と「に」をいれてはどうか。

【委員長】

「に」が入ることによって、客観的な視点が入り、ニュアンスが違う。参考までにということではどうか。

【委員 G】

消されているところに「に」が入っている。

【委員長】

主体者としての意識が入ったのか。

【委員 D】

並列的な表現のためではないか。

【委員 A】

強調したかったのではないか。

【委員長】

委員 B のような考えもあるが、現在「覇者」というわけではないので、絶対に使ってはいけないというわけではないと思う。

【委員 D】

私は入れたい。

【委員 A】

北条時代は、伊豆や駿東が領地だったので、関東という表現は違う。駿東伊豆関東の覇者である。現在の箱根では、切れない。

【委員 D】

関八州という表現になる。

【委員長】

前文でのポイントになるので、上手に表現すればよいのではないか。

【委員 C】

参考までに振興ビジョンでは、「小田原市は中世には関東最大の城下町」という表現をしている。

【委員長】

文化条例がすごく意味があるのが、共有している文化があるということである。

小田原にしかないものを表現できることである。

【委員 B】

資料 3 - 2 の 3 段落目も小田原の誇りを感じるが、「私たち市民の活動」というように並

べている。なぜ「市民活動」なのかという疑問がある。

【文化政策係長】

戦後からずっと活動されてきている劇団や美術展が小田原では盛んにおこなわれてきたというところを私たち市民の活動というところで表現した。

【副委員長】

敢えて入れるなら、「伝統文化、なりわり文化、生活文化、芸術文化」である。

【委員 B】

同じ文内で、～文化と並んでいて、市民の活動とくると活動は何か違うものになる。

【委員 A】

市民が活動しているということになるので、主体は市民だったということをお願いしたいのだと思う。

【委員 B】

「これらの」を削除して、「文化は～」からはじめてはどうか。

【委員長】

「私たち」で統一し、すっきり「市民」は取る。

【委員 A】

「～芸術文化、それらを支えてきた私たち。文化は～以下同文」という表現がよいのではないか。

【委員 C】

前文は、「私たち」として統一が良いと思う。

パブリックコメントの案も統一してほしい。

パブリックコメントより前文案の方が良いと思う。パブコメは、「文化芸術の創造」が、「伝統文化、なりわり文化、生活文化～」の行為に位置付けられている感じをうけるため。

【委員 F】

芸術文化のところは、これらの文化は過去から現在へ～のところを強調したい。芸術文化は技術を磨き上げるものなので、下の部分が潜ってしまう。僕だったら、芸術文化は入れない。下の部分を活かしたいため。

【委員長】

芸術文化というところを強調して行った方が良いという意見があったが、どうか。

【副委員長】

芸術文化と言った方が伝わる部分があると思う。前三つだけだと自分の活動が含まれていないと思う方もいる。

【委員 C】

同じ意見である。文化の中に、芸術文化があって、創造につながっていくと思う。

頭のところで、文化芸術というところに異論がある。

「文化の重要な一翼を担う」文化芸術としてはどうか。「中核をなす」という表現は、一

翼を担うということにしてはどうか。

【文化政策係長】

文化と文化芸術と芸術文化という表現を分けている。

【委員長】

見方によっては、中核をなすという。

【委員 A】

芸術とは何かという議論になる。寄木は芸術なのか技なのかということになり、サインがあるかないかということになった。

一般的に芸術文化とはこういうことだということに落とし込むかのがよいのではないか。

【委員 B】

文化芸術という言葉ここに使う必然性が感じられない。文化芸術が出てくるタイミングが早いのと、ここで定義して良いのかということになる。文化そのものなのではないか。文化にすれば、トーンがそろろう。

【委員長】

創造や革新を促していく力があるのが芸術文化ではないか。4段落目がの前にでてこない「感動は行動に移す～」というパラグラフが唐突になると思う。

【委員 B】

伝統文化、なりわい文化～の個所で、文化芸術は受け継がれるものなので、ここに入れてはどうか。

【委員 C】

創造につなげるなら文化芸術のところにつながるが、連綿と受け継がれにはつながりにくい。

【委員長】

前半の連綿～は伝統文化やなりわい文化～につなげて、後半のさらに未来に向けて～のところに文化芸術をつなげてはどうか。

【委員 A】

連綿と受け継がれるのが伝統文化で、創造が芸術文化と分けるのはどうか。

【文化政策係長】

最初の部分は文化にしたい。創造のところは、文化というだけだと弱いという思いがあり、文化芸術という言葉を入れたいと思う。今おっしゃっていただいた、これらの文化は～のところに芸術文化を含めた表現にしたい。

【委員 F】

感動は～という分は取るのか。

【委員長】

ここは取らずに、今の表現を加えるとより生きるということである。

【副委員長】

パブコメ案の資料 2 - 2 で市民の役割のところ、理念の 5 つ目のところで、「～図られるようにするとともに」というところは、「文化振興で経済の発展に貢献する」くらいかと思う。

市民の役割の 1 行目、「豊かな小田原の」を取って、「自らの生活を豊かにする」としたらどうか。

市の責務のところだが、「長期的な視点に立つ」というところを一番求めたいところである。

そもそも条例を制定することは、長期的な視野を持っているのだが、文化を育むことは時間がかかることを認識し、というような表現を入れて、それにそって文化の計画を立てるということが盛り込まれてほしい。

【委員長】

長期的な視野に立った政策の推進ということか。

【副委員長】

(8) の小田原市文化振興ビジョン推進委員会から意見を求めることというのは、(7) に書いている「評価」とは別に全般的なことに意見が求められるということか。

【委員長】

委員会の役割を今まで議論してこなかったが、どういうことか。

【文化政策係長】

評価と別に意見を求める場を設けるという位置づけを考えている。

【副委員長】

「私たち」と言った時に企業や団体や事業者を定義しておいた方がよいのではないかと思う。

地元貢献するということころを企業に言ってもよいのではないか。

【委員 D】

難しい提案である。市民というのは、企業の構成員である場合が多い。

例えば、市民でなくても小田原市に関わる人を私たち市民と解釈してしまえば、あえて入れなくてもよいのではと思うがどうか。

【委員長】

市民というと一般市民ととらえてしまう。

【委員 H】

団体も市民である。あえて言えば、企業も小田原市民が企業人であり小田原市民である。団体だからといっても元を言えば市民である。そこを敢えて載せるのはどうか。

【委員 D】

企業メセナは企業がもともと考えなければならないこと。

【委員 A】

市民活動をやるときに様々な企業から寄付をもらって経済的な支援を受けている。そうした側面をどう考えるかというところである。

【委員長】

市民の役割市の責務のところか。市民の役割の中に特出しするか。

【委員 B】

そうすると非常に意味が強くなってしまう。

現在、国の文化政策では、文化の振興施策において教育機関への言及が必須であり、大学との連携などを前面に出す傾向にある。

大学に限らず教育機関に言及すると、そこに具体的な役割が求められる根拠になり、重みが出てきてしまう。

同様に、小田原の文化振興において、企業の在り方と方向性が合うのかという点は気を付けないといけない部分である。企業、経済活動、産業ということを入れるのであれば、考えるべき。

【委員長】

連携相手という部分で入れることでよいか。

【委員 A】

パブリックコメントの資料の小田原市文化振興ビジョン委員会が固有名詞になっているが、この名前をここで使ってしまってもよいのか。評価委員会などの抽象的な機能表現の委員会にしておいた方がよいのではないか。

【委員 B】

固有名詞を入れることで、継続していくという覚悟だと思う。

【文化部副部長】

委員会を設置したときに、そのような認識を持っている。

【委員 A】

コミットメントしていただけるのであれば、問題はない。前言は撤回する。

【芸術文化活動専門員】

評価の方法など実際どのように実施していただくかは、今後の課題である。

【委員長】

全員が事業評価などに関わっていくというのは、難しいので、何人かということになるかもしれない。

【委員 C】

パブリックコメントのスケジュールについて確認したい。

【文化政策係長】

6月15日から1か月間を予定している。次回中間答申として、骨子案をいただくことになる。

【委員 C】

次回の委員会で確認をするのか。

【文化政策係長】

次回の委員会までに確認をとって、確定させる。

【委員長】

関係者にヒアリングをプラスしないのか。

【文化部副部長】

まだはっきりはしていない。団体の方などと意見交換する場所は必要かもしれない。

【委員長】

公にされても目にする場面がない。

【文化政策課課長】

理念的なものであるので、議論が広がってしまう可能性もある。

【文化部副部長】

公開ヒアリングというイメージで行うかだと思う。

【委員長】

委員会としての統一見解を明確に示すべき

【委員 C】

文言で矛盾がないようにしたいとおもう

【委員 H】

「私たち」であるとか「覇者」という言葉などいろいろあったが、小田原の昔からの色々を踏まえて言葉を柔らかく変えて、お城が中心であり、封建的であるところもあるので、二面性がある人種であるということを考えると市民がパッと見て飛び込めるようなものではないといけない。

話を聞いていて、委員の中でもとらえ方が違うので、市民に流した時にどういう風にするのかと思っている。

小田原の地域性を見ながら進めて行った方がいい。

【委員 G】

芸術家として参加して、こうした文言を入れていただくことで、ありがたいと感じるが偏らないように、固い言葉だけではなく、ほっとするあたたかい言葉を入れて、子どもも読んでもらえるようなものにしたい。

議題（２）中間答申について

事務局より、資料５に基づき説明。

資料５の説明について鏡の形式別紙のとおりのところ骨子案がつくことにある。

なお以下について、内容については、委員長と副委員長と調整をさせていただきたい。

５月２３日（月）が中間答申となっているが、市長に提出していただく際に議論を踏まえて強調したいところを委員長からご説明いただきたい。

市長の予定は 11 時から 12 時とっている。10 時から確認をして市長へ答申する予定である。

委員一同承知

以上で議題は終了し、次回の日程を確認して会議は終了した。